

乳幼児の事故体験と母親の事故防止策の 実施度に関する調査研究 (分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

田中哲郎 飯泉 守 川上恒紀
沼部博直 本多輝男

要約：今回の調査により、76.2%の子供達は何らかの危険な体験をしていた。一方、母親の事故防止安全対策の実施度として特に低かったのは、母親が用事等で小児の監視が十分出来ないとき、ベビーサークル等の安全な場所に子供を入れることであった。今回の結果より、ベビーサークル等の使用、誤飲防止、浴槽での溺水防止について、特に母親を指導、啓蒙する必要があると考えられた。

見出し語 事故体験、安全対策、事故防止

研究目的 乳幼児の事故を考える際に、まず事故の発生頻度が問題となるが、我が国においては小児の事故の発生頻度に関する研究は少ない。また、乳幼児の事故防止を積極的に実施するためには、母親の事故防止に対する考え方、環境整備などの実施度を知ることが大切である。

米国小児科学会は、小児の事故防止のプロジェクトとして、健診等で診療所を受診した際に、小児の事故防止のために必要な項目について、アンケート調査を実施し、その結果に基づいて、保護者が子供の安全対策について不十分であると思われる項目について安全教育を実施している¹⁾。

今回、我々は我が国における子供の事故体験の有無、母親の子供の事故防止への考え方や安全対策の実施度について調査を行ない、小児の事故対策上の問題点を明らかにし、我が国における母親への事故防止の指導の際の資料とすることを目的に調査研究を行った。

方法 調査は平成元年春にアンケート用紙への記入にて行った。

記入者は、子供が保育園に通園している母親で、保育園を経由して依頼したことより、回答率は90%以上であった。

調査対象者は東京都八王子市の幼児とその母親526名、北海道根室市の幼児とその母親327名の合計853名とした。

アンケート対象者の層性として、母親の年齢は、20～23歳13名(1.5%)、24～26歳43名(5.1%)、27～30歳163名(19.3%)、31～33歳225名(26.6%)、34～37歳252名(29.8%)、38～40歳104名(12.3%)、41歳以上46名(5.4%)であった。母親の最終学歴は中学、高校卒507名(60.1%)、短大、専門学校卒219名(26.0%)、大学卒114名(13.5%)であった。

子供の年齢は、1～3歳217名、4～5歳418名(49.5%)、6～7歳208名(24.6%)であった。又、子供の性別は男434名(51.1%)、女415名(48.9%)であった。

結果 1. 子供の事故体験

はじめに、今までに子供が事故やもう少しで事故に巻き込まれそうになった体験の有無につ

子供の事故体験

	東京 (502名)	根室 (300名)	合計 (802名)	両地域間の有意差
1. 切り傷、打撲にて医師受診の体験	197(39.2%)	99(33.0%)	296(36.9%)	NS
2. 誤 飲	72(14.3%)	61(20.3%)	133(16.6%)	P<0.05
3. 交通事故又はもう少しでの体験	58(11.6%)	39(13.0%)	97(12.1%)	NS
4. 溺水、溺れかかった体験	52(10.4%)	28(9.3%)	80(10.0%)	NS
5. 上記以外の危険な体験	31(6.2%)	10(3.3%)	41(5.1%)	P<0.01
6. 危険な体験なし	119(23.7%)	72(24.0%)	191(23.8%)	NS

いて調査を行った。

切り傷、打撲にて医師を受診した体験を持つものは 802名中 296名の36.9%、誤飲体験 133名(16.5%)であった。2回以上誤飲した者は40名で、2回が31名、3回以上が9名であった。誤飲の内容物はタバコが 113名、防虫剤3名、硬貨9名、ボタン型電池4名、玩具22名、石鹼、洗剤9名、乾燥剤2名、灯油1名、薬8名等であった。

交通事故、またはもう少しで交通事故に巻き込まれそうになった体験を持つ小児は97名(12.1%)、溺水及びもう少しで溺れるところであった体験を持つ小児は80名(10.0%)、その他の危険な体験を持つ小児は41名(5.1%)であった。上記のような危険な体験の全くない小児は 191名(23.8%)にすぎなかった。

また、これらの事故体験について、東京、根室間における地域差をみると、誤飲体験は東京で72名(14.3%)、根室61名(20.3%)で、根室が東京に比べ有意(P<0.05)に高かったが、他の体験には明らかな差はみられなかった。

2. 母親の子供への安全対策実施度

調査する安全対策の項目はフラミンガムの調査を参考にし、我が国の実状に合うように一部改変し使用した。

質問項目は24項目とし、回答は、“はい”

“いいえ”又は、“いつも実施”“時々実施”などより、一つを選択してもらった。

今回の安全対策の実施度に関する調査では

“はい”又は“いつも実施している”ものの

みを実施とし、“時々実施している”は実施が不完全とし、実施していないとした。

小児への安全対策実施度で最も低かった項目は、母親が家事などの用事で、子供の監視が出来なくなる際に、子供を安全なベビーサークルやベビーベッドに入れるなどの安全対策で、実施している母親はわずか 10.3%であった。

ストーブによる熱傷防止(25.5%)、子供の手の届く範囲内にタバコや誤飲の可能性のある小物を置かないように整理している母親は 26.0%であった。

実家等訪問先での安全点検を実施している母親は 26.3%と低かった。

また、最近問題となっている浴室での溺水事故防止のため、入浴後直ちに水を抜く、ドアに鍵をかけるなどを行っている母親は28.7%であった。車でのベビーチェアの使用は 29.5%であった。

薬剤の保管を厳重にしている母親は31.3%、おもちゃの安全点検の実施している母親は32.4%、災害時の避難法の話し合いは 36.2%、消火器の常備は 57.4%、古い薬の処分は58.2%、幼児1人での入浴に注意している母親は 62.6%、自転車の2人乗りの禁止は 70.1%、マッチの管理 70.3%、子供だけの留守番をさせない母親は 72.5%、車のドアロックの使用 82.4%、危険な子供の遊びに注意する母親は 90.6%、親の寝タバコの禁止 92.2%、交通安全教育の実施 95.6%、子供だけの水泳の禁止は、99.2%であった。

東京と根室における実施度の地域差について

みると、東京が根室より有意に実施度の高い項目はおもちゃの安全点検、子供の乗車位置、ポットや鍋への接触防止、駐車中の車への子供1人での残留、車のドアロックの使用、寝煙草の

禁止、交通安全教育の実施であった。

根室で高かったのは、浴室での溺水防止、幼児1人での入浴の禁止、自転車の2人乗りの禁止の項目であった。

母親の子供への安全対策実施度

安全対策項目	実施度 (%)			両地域間の有意差
	東京	根室	合計	
母親が監視不可能時の柵使用	11.0	9.1	10.3	NS
ストープの安全柵使用	26.0	25.0	25.5	NS
危険な小物の整理	24.8	28.0	26.0	NS
訪問先での安全点検	<u>29.7</u>	20.8	26.3	P<0.01
車でのベビーチェアの使用	29.8	28.6	29.5	NS
浴室での溺水防止	24.9	<u>34.7</u>	28.7	P<0.01
薬剤の保管	30.1	33.3	31.3	NS
おもちゃの安全点検	<u>36.7</u>	25.3	32.4	P<0.001
災害時の避難法の検討	37.3	34.4	36.2	NS
子供の乗車位置	<u>62.7</u>	38.5	54.0	P<0.001
ポットや鍋への接触防止	<u>59.2</u>	53.9	57.0	P<0.01
消火器の常備	58.6	55.4	57.4	NS
駐車時子供1人の残留	<u>65.4</u>	46.0	58.1	P<0.001
古い薬の処分	56.8	60.5	58.2	NS
幼児1人での入浴	58.3	<u>69.9</u>	62.6	P<0.01
自転車の2人乗り	58.6	<u>89.3</u>	70.1	P<0.001
マッチの管理	71.8	67.5	70.3	NS
子供の留守番	72.0	73.2	72.5	NS
車のドアロック使用	<u>90.8</u>	68.7	82.4	P<0.001
危険な子供の遊びへの注意	89.5	92.4	90.6	NS
寝たばこ	<u>95.3</u>	87.3	92.2	P<0.001
交通安全教育の実施	<u>96.9</u>	93.4	95.6	P<0.05
子供だけの水遊び	96.9	98.7	97.6	NS
子供だけの水泳	98.8	99.7	99.2	NS

考察 我が国においては、小児の事故の発生率に関する疫学調査は館²⁾の報告がみられるのみで、乳幼児の事故の発生頻度については現在でも必ずしも明らかでない。

また、母親の事故防止のための安全対策実施度に関する調査も少ない^{3) 4)}。

そこで、子供の事故体験と母親の子供に対する安全対策実施度について調査を行った。

対象は、都会である東京都八王子市と地方都市である北海道根室市としたが、サンプル数が少ないことなど、疫学調査と必ずしも十分でないかもしれないが、ある程度の傾向を知るためには十分と思われる。

両地域間で母親、子供の属性に大きな差はみられなかったが、母親の最終学歴では根室では中学・高校卒が多く、東京では大学卒の母親が多かった。

今回の調査結果より、切り傷、打撲にて医師

を受診するような外傷体験を持つ子供は37%と多数であった。これらは、一歩間違えば、重大な身体に機能障害を残すような重大な事故に発展する危険性もみられる事故である。

しかし、一方では小児の正常な発達を考えると、多少の切り傷や打撲は危険についての学習という意味から、全ての切り傷、打撲を防止する必要はないと考えられる。個々の事例についての詳細な検討が必要と思われる。次いで多かった体験としては、誤飲が132名見られた事があげられる。しかも、これらの体験者の中に2回以上の誤飲体験者が40名もいたことは大きな問題と思われた。また、誤飲物では、今までの報告と同じくタバコが大多数占めていた⁵⁾。

また、溺水、交通事故の体験やもう少しで巻き込まれそうになった体験者も多く見られた。これらは子供にとって、危険への学習効果は余り無く、一歩誤れば、直接生命を失う可能性の

ある体験であり、防止策が特に必要である。

母親の事故に対する安全対策実施度についての大きな問題点は、母親が家事や用事で乳幼児より目を離す際に、ベビーサークルの中やベビーベットの柵の中に入れると答えた者が 10%しかなかった点である。

一方、我々の事故検討からは、浴槽での溺水事故症例の多くが、母親がほんの少し子供より目を離した際に発生している⁶⁾こと、また、誤飲等の報告でも、母親の家事に忙しい時間帯に多いとの報告⁷⁾より、子供より目を離さないことが乳幼児の事故防止の基本と考えられる。しかし、我が国においては、住宅が狭いことより、ベビーベット、ベビーサークルの使用が難しいこともあり、この点の改善が重要な課題と思えた。

また、今回の調査では、車のベビーチェアへの使用頻度が低く出ているが、これは、アンケートを取る際に車の所有の有無について訪ねなかったもので、必ずしも正確な数値ではないかもしれない。

子供の手の届く範囲の小物の整理を実施している母親は 26%にすぎなかった事も、誤飲が多いことと一致しているのではないかと考えられた。

浴槽での溺水防止のために、入浴後直ちに浴槽の水を抜いたり、浴室へ子供が容易に入れないようにするための鍵などをかけて注意している家族は 28.7%のみであり、2歳未満の溺水が浴槽で多く発生していることを考えると対策が十分でないと思われた。

また、安全対策の実施度について、東京、根室間で差をみると、浴室での事故防止と自転車の 2人乗りの禁止が根室で高い以外は東京での実施率の高い項目が多かった。このことより、地域により子供の安全対策に対する考え方に差が存在すると推測され、大都市では小児の事故防止に対する認識が地方に比べやや高いのではないかと考えられた。

以上の結果より、母親の事故防止についての安全対策として特に問題のある点は、食事の準備等で母親が子供より目を離した際にどの様に子供の安全を確保するかという点と、誤飲対策

にあると思われた。また、我が国の独特の入浴方法に起因すると思われる浴槽での溺水防止に対する安全対策が不足していると考えられた。

今回の調査により乳幼児健診時に、母親にアンケートで事故防止のための安全対策実施状態をチェックし、安全対策が不十分なものについて、指導する方法は小児の事故防止にとって有効な方法であると考えられた。

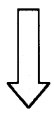
おわりに 今回の調査により、子供の事故体験として切り傷や打撲等の外傷で医師を受診した体験を持つ者は 37.0%、誤飲は 16.5%であった。76.2%の子供達が何らかの危険な体験をしていた。

一方、母親の事故防止対策の実施度として低かったのは、母親が用事等で小児の監視が十分出来ない時、ベビーサークル等の安全な場所に子供を入れることを実施している者が少ないことであった。

今回の結果より、ベビーサークルの使用、誤飲防止、浴槽での溺水防止について、特に母親を指導、啓蒙する必要があると考えられた。

文献

- 1) American Academy of pediatrics:
"Guideline for health supervision" and
"The injury prevention program", 1985.
- 2) 館 正知: 乳幼児の死亡に至らぬ不慮の事故
その調査方法と若干の成績, 厚生指標,
7: P. 3 ~ 8, 1960
- 3) 田中哲郎: 子供の事故と事故防止に関する調査研究, 昭和63年度, 厚生省心身障害研究報告書, 「小児記の主な健康障害要因に関する研究」, P. 146~148, 1989.
- 4) 加納栄三: 小児の事故と予防, 小児科,
29(11), 1311~1322, 1988.
- 5) 松谷剛志: 家庭用品と子どもの安全, 愛育,
55巻(3) 42~45, 1990.
- 6) 田中哲郎: 小児 DOA症例の特徴と問題点, 日本救急医学会関東地方会雑誌, 10(2),
597~603, 1990.
- 7) 熊谷健伸他: 小児の誤飲事故と予防対策, 小児保健研究, 45(6), 561~568, 1986.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 今回の調査により、76.2%の子供達が何らかの危険な体験をしていた。一方、母親の事故防止安全対策の実施度として特に低かったのは、母親が用事等で小児の監視が十分出来ないとき、ベビーサークル等の安全な場所に子供を入れることであった。今回の結果より、ベビーサークル等の使用、誤飲防止、浴槽での溺水防止について、特に母親を指事、啓蒙する必要があると考えられた。